

大正期愛知県における織物工場の分布特性

中 島 茂

1. はじめに

前稿で筆者は「個別工場一覧」を整理して、明治期における愛知県の織物工場の分布動向を市町村単位で分析した¹⁾。本稿はその続編として、大正期の愛知県における織物工場の分布動向を、市町村単位で分析する。大正期（1912年～1925年）は、第一次世界大戦という欧州における大戦争を直接、間接の背景として、経済的な急成長とその反動としての後半期における不況によって特徴付けられる。織物生産においても、大正前半期は輸出向け広幅白綿布類を中心に、全国的に綿織物生産が急拡大し、とりわけ、大阪府と愛知県は二大産地として、生産規模が急速に拡大した。その状況についても、拙著（2001）において全国動向を²⁾、拙稿（2011）において愛知県の状況を分析した³⁾。愛知県においても綿織物生産の急拡大がみられると同時に、毛織物生産も急速に成長して、戦前期から戦後期にかけての愛知県における繊維工業の基本的特性が形成されるようになった。他方で、県内の絹織物、絹綿交織物の生産は、綿織物や毛織物に比べて、相対的な地位の低下が顕著にみられた。

では、こうした状況が、織物種類別にみた織物工場の地域的展開にどのように反映したのであろうか。この点が本稿での検討課題である。前稿と同じく、「個別工場一覧」を用いた市町村単位での織物工場職工数の分布を地図に落とし、大正初年の状況と大正中期の状況を比較検討することで、この課題に応えることとする。さらに、尾西地方における明治後期から大正中期にかけての個別的な工場の動向を、中島郡今伊勢村の事例分析から明らかにし、地域全体としての分布特性が、どのような個別工場の動向から生じてきたのかを示すこととする。本稿で用いる「個別工場一覧」は、1912（大正元）年と1913（大正

2) 年については、『愛知県統計書』所収の「工場表」を、1916年～1919年については、『工場通覧』を利用する。そして、愛知県内の織物工場に関する工場数、職工数、ならびに、原動機使用工場の状況を郡市別、市町村別の分布動向として分析する。

なお、『愛知県統計書』と『工場通覧』（大正5年版）については、該当年度の12月31日現在の資料であるが、大正8年版、同9年版、同10年版の『工場通覧』については、それぞれが1918（大正7）年、1919（大正8）年、1920（大正9）年の各1月1日現在の資料となっており、実質的には、それぞれ1917年末、1918年末、1919年末の状況に対応しているため、「機業統計」との比較のためにも、1917年値～1919年値として扱うこととした。1914（大正3）年と1915（大正4）年については、おそらく調査がなく、『工場通覧』の刊行がないだけでなく、『愛知県統計書』にも「工場表」の記載がないため、空白年となっている⁴⁾。また、『工場通覧』は大正10年版以降、大正期における刊行がなく、県資料においても、「個別工場一覧」がないため、本稿での分析も大正中期までにとどまることを付言しておく。さらにもう一点、織物種類別に関して注すると、「個別工場一覧」に記載の製品種類は、個別工場ごとに1品目のみの工場もあれば、多品目を記載した工場も数多くみられる。本稿では整理分類の都合上、複数品目を掲げる工場については、その筆頭に記載された品目の種類を、当該工場の織物種類とみなして集計処理を行っている。このため、実際には綿織物と絹綿交織、毛織物をすべて製造している工場であっても、筆頭品目が綿織物であれば、綿織物工場に分類されている。そこで分析を進める上では地域特性を考慮しながら、特定品目への特化のみではない事例にはその旨指摘しながら論述する。以下では、まず大正期における愛知県の全体的な織物工場動向を検討するが、それに先だって、「個別工場一覧」集計値と既存の「機業統計」の数値との照合を行っておこう。

2. 大正期における織物工場の動向

(1) 既存統計と「個別工場一覧」集計値との照合

大正期の『愛知県統計書』に記載をみる「機業統計」は、農商務統計様式に

したがって、1921（大正10）年までは生産形態別（工場、家内工業、織元、賃織業の4形態、ただし、1915年以降、「工場」は「職工数10人以上ノモノ」、「家内工業」は「職工数10人未満ノモノ」に名称変更）機業戸数、職工数、織機台数（うち力織機台数）を掲載している。ここでは、その総数と「工場」に関する数値、ならびに、「個別工場一覧」の工場数および職工数集計値を第1表に掲げた。総数は4生産形態の合計値で、この時期にはなお出機で「賃織業」を利用する「工場」や「織元」が多く、多数の賃織業が総数を多くしている。なお、『愛知県統計書』では、1917（大正6）年以降、生産形態別には戸数のみの記載となり、職工数や織機台数についての生産形態別数値が利用できないため、機業統計と個別工場一覧との職工数に関する照合は、1912年、13年、16年の3カ年分のみにとどまる。また、機業統計では絹織物、絹綿交織

第1表 機業統計と個別工場一覧集計値との照合

	絹・絹綿・綿・麻・雑類					
	戸数			職工数（人）		
	総数	工場	工場表	総数	工場	工場表
1912年	21,163	627	527	39,194	15,266	19,308
1913年	17,889	565	499	40,217	17,073	14,897
1914年	15,520	519	…	42,671	17,622	…
1915年	14,136	620	…	41,236	20,860	…
1916年	16,478	717	536	48,630	24,730	19,758
1917年	17,477	692	587	53,399	…	27,583
1918年	17,634	589	592	57,316	…	29,028
1919年	20,243	617	712	71,020	…	31,763
1920年	21,107	565	…	70,418	…	…
毛織物・同交織物						
1912年	365	47	43	2,400	1,963	2,108
1913年	210	68	41	2,525	2,381	3,042
1914年	86	62	…	2,600	2,501	…
1915年	128	63	…	2,519	2,239	…
1916年	108	71	46	2,887	2,638	2,693
1917年	224	110	78	4,137	…	3,538
1918年	339	133	129	5,172	…	4,690
1919年	396	138	135	6,721	…	4,811
1920年	384	126	…	6,047	…	…

注) 総数と工場は機業統計の数値で、総数には工場、家内工業、織元、賃織業を含む。
工場表は個別工場一覧の集計値。いずれも工場は職工数10人以上。…は資料なし。
大正8年、9年、10年版『工場通覧』はそれぞれ1918年、19年、20年の1月1日現在であるため、他の資料に合わせて、それぞれを各前年12月31日現在とみなして記載。
出典) 『愛知県統計書』、1916年以降の工場表欄は当該年の『工場通覧』より作成。

物、綿織物、麻織物、織物雑類が一括された数値として示され、毛織物関係の数値のみ別途掲載されているため、ここでは「個別工場一覧」の数値をそれに合わせて集計している。ただし、綿織物や絹綿交織と毛織物をともに製織する工場も存在するため、「個別工場一覧」では、前述のように、製品種類に記載をみる筆頭品目の種類によって数値を整理している。機業統計の場合、この両者の数値が重複記載されている可能性もあるため、厳密な比較が難しいことに留意する必要がある。

第1表によれば、大正初期頃の工場数は、毛織物以外の分について、機業統計の方が100工場前後多くなっており、1916（大正5）年値では180ほどの差異が生じているが、1918年、19年値では、逆に「個別工場一覧」の数値が大きくなっている。また、職工数では1912年値で機業統計の方が少ないものの、13年と16年では機業統計の方が多く示されている。とくに1916年では5,000人と差異が大きくなっている。さらに、「個別工場一覧」は年次による数値の変動が大きく、この点は要因の一つとして、「個別工場一覧」の業種分類は当該年度の生産額筆頭の品目によっており、兼営織布を行う大規模紡績工場が、たまたまある年次で織布部門の生産額が紡績部門を上回っていた場合、紡績業ではなく織物業に分類され、その職工数がすべて織物業とカウントされることによって、数値が変動するためである。大規模工場の場合、1工場でも数千人の幅で数値が変動することになる。

とはいえ、大正中期にかけて、工場数で見ると、「個別工場一覧」の数値が機業統計と大きく乖離しているわけではないため、おおむね織物生産の地域的な特性を把握する上で、支障のある数値ではないとみなされる。毛織物に関しては、年次による数値の変動はより小さく、また、機業統計と「個別工場一覧」の数値との乖離もより少ないため、「個別工場一覧」の集計値を用いることにほぼ問題はないとみなされる。

(2) 全県でみる織物工場の展開状況

大正初期から中期にかけての愛知県の織物工場は、第2表にみるように、全体とすれば急速な増加傾向を示し、1912年の570工場、21,416人から1920年の

第2表 大正期愛知県の織物工場累年表

織物合計						綿織物				
	工場数	職工数	動力工場	原動機数	馬力数	工場数	職工数	動力工場	原動機数	馬力数
1912年	570	21,416	229	300	5,743	350	13,392	219	283	5,342
1913年	540	17,939	237	271	4,000	354	10,133	221	250	3,509
1916年	582	22,451	280	375	6,926	408	16,739	255	339	6,282
1918年	665	31,121	343	582	10,460	474	24,984	310	525	9,868
1919年	721	33,718	366	636	7,872	450	24,244	311	540	6,783
1920年	847	36,574	484	756	13,180	572	26,340	417	629	11,194
絹織物						毛織物				
	工場数	職工数	動力工場	原動機数	馬力数	工場数	職工数	動力工場	原動機数	馬力数
1912年	87	3,720	4	9	212	43	2,108	5	7	174
1913年	74	2,863	8	10	220	41	3,042	7	10	257
1916年	28	650	3	3	17	46	2,693	10	21	587
1918年	29	711	4	4	27	78	3,538	18	39	518
1919年	44	2,608	8	21	364	129	4,690	28	53	634
1920年	49	2,310	9	20	283	135	4,811	32	64	888
絹綿交織						その他				
	工場数	職工数	動力工場	原動機数	馬力数	工場数	職工数	動力工場	原動機数	馬力数
1912年	62	1,704	1	1	15	28	492	-	-	-
1913年	44	1,362	1	1	15	27	539	-	-	-
1916年	90	2,204	8	8	18	10	165	4	4	22
1918年	77	1,769	11	14	47	7	119	-	-	-
1919年	65	1,633	14	16	67	33	543	5	6	25
1920年	48	2,051	7	18	620	43	1,062	19	25	197

注) 単位は、工場数(工場)、職工数(人)、動力工場(工場)、原動機数(台)、馬力数(馬力)。-はゼロ。
 なお、各年の記載事実は、1916年までは各年の12月31日現在、1918年以降は各年の1月1日現在である。

出典) 1912年、13年は『愛知県統計書』、1916年以降は『工場通覧』より作成。

847工場、36,574人へ、工場数で1.48倍、職工数では1.70倍の増加であった。この間に原動機使用工場は229工場から484工場、原動機台数は300台から756台、馬力数は5,743馬力から13,180馬力へ、それぞれ2.11倍、2.52倍、2.29倍の増加で、工場数の増加以上に動力化がいっそう進展したことがわかる。原動機使用工場の割合は同じ間に40.1%から57.1%へ上昇し、過半数に達したが、織物種類や郡市ごとにはかなりの差異が認められる。しかし、同じ時期の大阪府和泉地方では一部の品目を除いて、ほぼ100%に近い原動機使用工場の比率であったことと比べると、なお大きな隔たりがみられる。

織物種類別にみると、綿織物工場が全体の6割～7割を占めて、他品目を圧

倒しており、職工数でも綿織物工場が、年による変動はあるものの、ほぼ7割前後を占めている。さらに原動機使用工場数、原動機台数、馬力数でも綿織物工場が8割～9割を占め、県全体とすれば、この時期の愛知県は綿織物を織物生産の中心としていたことがわかる。また、原動機使用工場の割合は1912年の62.5%から20年の72.9%へ上昇しており、綿織物に関しては動力化がより進展していたことがわかる。大正初期には綿織物工場に次いで、絹織物工場が大きな割合を占めていたが、その後は急速に落ち込み、大正中期中にかけてやや回復するものの、1912年～20年の間に工場数は87から49へ、職工数は3,720人から2,310人へ減少している。原動機使用工場は増えてはいるものの、なおわずかな数にとどまっている。大正初期に工場数で絹織物に次いだ絹綿交織工場は、その後も増減を繰り返し、1916年には90工場2,204人を数えるものの、20年には48工場2,051人とどまっており、原動機使用工場も18年、19年には二桁台に乗るものの、20年には半減している。ただし、原動機台数や馬力数は増大傾向を示して

大正初期には綿織物、絹織物、絹綿交織の各工場に及ばなかった毛織物工場は、その後ほぼ一貫して増加する傾向を示し、1912年の43工場2,108人から1920年には135工場4,811人となり、同年の織物工場の15.9%、職工数の13.2%を占めるに至っている。原動機使用工場もこの間に5工場から32工場へ、台数は7台から64台へ、馬力数は174馬力から888馬力へと、いずれも急速な拡大を示し、原動機使用工場の割合も11.6%から23.7%へ上昇している。

このように、愛知県では、大正初期から中期にかけての時期に綿織物工場が隆盛を迎えるとともに、毛織物工場が急速に台頭してきたが、その一方では絹織物工場や絹綿交織工場がその存在感を急速に失い、次第に影を潜めていく状況でもあった。ただし、個別工場の動向としては、単に絹織物や絹綿交織工場が姿を消し、綿織物や毛織物工場が新たに現れてくるというだけではなく、絹綿交織などから綿織物や毛織物へと製品目を転換させながら、同一工場が分類上他品目へ変わっていく事例も多く存在している。しかし、明治期においてもみたとおり、そうした品目ごとの工場分布特性は、地域的に多様であり、尾西、知多、三河という大きな地域単位のみならず、各地域内でも町村ごとに多

様な傾向を示している。以下では、大正初期、大正中期の二つの時期に分けて、織物工場の分布特性と分布動向をみたのちに、中島郡今伊勢村を事例に個別工場の動向を分析していきたい。

3. 大正初期における織物工場の分布

1912（大正元）年における愛知県の郡市別種類別織物工場に関する数値を第3表に掲げたが、総数570工場のうち、名古屋市に181工場7,067人と最も多く、知多郡の111工場5,675人がこれに次いでいる。これらに中島郡の78工場2,533人と丹羽郡の42工場1,207人が続いており、前稿でみた前年1911（明治44）年とほぼ同様の地域的傾向を示している。なかでも、名古屋市における織物工場の増加が目につくが、原動機使用工場では、名古屋市は12工場にとどまり、ほとんど動力化が進展していない。これに対して、知多郡では109工場とほぼ動力化が達成されている。原動機使用工場は全県で229工場を数え、ほぼその半数近くが知多郡に集中している。三河地方は豊橋市、碧海郡、幡豆郡、額田郡、宝飯郡、渥美郡にのみ織物工場が所在しているが、合わせて96工場2,532人と、これも明治期と同様、中島郡1郡の集積度と同等である。とくに碧海、幡豆、額田3郡に織物工場が集まり、この3郡で76工場2,075人を占めている。また、原動機使用工場は60工場と6割を超える工場に原動機が導入されていて、知多を除く尾張地方よりも動力化が進展している。

織物種類別では、絹織物工場87工場3,720人のうち、49工場2,306人が名古屋市に集中しており、工場数では丹羽郡の19工場が、職工数では西春日井郡の642人がこれに次いでいる。このほか、葉栗郡、中島郡にある程度集まっており、三河では額田郡の1工場をみるのみである。絹綿交織工場は62工場1,704人中、中島郡に35工場1,174人が集中し、名古屋市の20工場399人がこれに次ぐが、このほかでは愛知、丹羽、葉栗3郡に各2～3工場をみるのみである。中心をなす綿織物工場は織物工場の所在するすべての郡市に所在しており、350工場13,392人中、知多郡に111工場5,675人が集中して、名古屋市の69工場2,836人がこれに次いでいる。このほか、丹羽、中島、碧海、幡豆、額田の各郡に20工場台、600人台～700人台の職工数を数えて、横並び状態となっ

第3表 大正初期愛知県の郡市別織物工場（1912年）

	織物合計			絹織物			絹縮交織物		
	工場数	職工数	馬力数	工場数	職工数	馬力数	工場数	職工数	馬力数
愛知県計	570 (229)	21,416	5,743	87 (4)	3,720	212	62 (1)	1,704	15
名古屋市	181 (12)	7,067	423	49 (1)	2,306	28	20 (-)	399	-
愛知郡 (7)	16 (9)	582	222	2 (-)	51	-	2 (-)	30	-
東春日井郡 (1)	1 (1)	15	8	-	-	-	-	-	-
西春日井郡 (5)	8 (5)	858	230	2 (1)	642	175	-	-	-
丹羽郡 (7)	42 (15)	1,207	212	19 (2)	399	9	3 (-)	64	-
葉栗郡 (6)	18 (3)	399	35	8 (-)	160	-	2 (-)	37	-
中島郡 (10)	78 (8)	2,533	133	5 (-)	131	-	35 (1)	1,174	15
海東郡 (4)	14 (7)	454	214	1 (-)	15	-	-	-	-
海西郡 (3)	5 (-)	94	-	-	-	-	-	-	-
知多郡 (25)	111 (109)	5,675	3,462	-	-	-	-	-	-
豊橋市	4 (4)	109	42	-	-	-	-	-	-
碧海郡 (7)	28 (20)	725	277	-	-	-	-	-	-
幡豆郡 (5)	21 (9)	682	175	-	-	-	-	-	-
額田郡 (9)	27 (14)	668	151	1 (-)	16	-	-	-	-
宝飯郡 (6)	13 (10)	302	80	-	-	-	-	-	-
渥美郡 (2)	3 (3)	46	81	-	-	-	-	-	-

注) 郡名欄の () は織物工場所在町村数、工場数欄の () 内は原動機使用工場数、単位は工場数(工場)、職工数(人)、馬力数(馬力)。織物工場のない西加茂、東加茂、北設楽、南設楽、八名の5郡は省略した。

出典) 『愛知県統計書』(大正元年版) 掲載の「工場表」を整理集計して作成。

ている。すなわち、この時期にあつて、綿織物工場は知多郡や大規模工場を擁する名古屋市など突出した郡市を別としても、愛知県内に最も遍在する織物工場となつており、尾西地方にも該当しているのである。さらに、毛織物工場は、工場数では他の織物種類より少ないとはいえ、43工場2,108人と、前年に比しても急速な増加傾向を示しており、とりわけ、名古屋市において23工場1,169人と急増している。これに次ぐ中島郡は10工場481人と前年より後退しているが、海東、海西2郡でも数を増やしつつあり、愛知県を特色づける存在となつてきている。

ここでは、やや遅ればせながらも動力化が進展しつつある状況を踏まえて、原動機の使用状況をもう少し詳しくみておこう。第4表は種類別郡市別に、原

大正期愛知県における織物工場の分布特性

綿織物			毛織物・同交織物			その他・不明		
工場数	職工数	馬力数	工場数	職工数	馬力数	工場数	職工数	馬力数
350 (219)	13,392	5,342	43 (5)	2,108	174	28 (-)	492	-
69 (9)	2,836	363	23 (2)	1,169	32	20 (-)	357	-
10 (8)	383	202	1 (1)	108	20	1 (-)	10	-
1 (1)	15	8	-	-	-	-	-	-
5 (4)	194	55	1 (-)	22	-	-	-	-
20 (13)	744	203	-	-	-	-	-	-
4 (3)	103	35	1	47	-	3 (-)	52	-
25 (6)	690	98	10 (1)	481	20	3 (-)	57	-
9 (6)	216	112	3 (1)	207	102	1 (-)	16	-
1 (-)	20	-	4 (-)	74	-	-	-	-
111 (109)	5,675	3,462	-	-	-	-	-	-
4 (4)	109	42	-	-	-	-	-	-
28 (20)	725	277	-	-	-	-	-	-
21 (9)	682	175	-	-	-	-	-	-
26 (14)	652	151	-	-	-	-	-	-
13 (10)	302	80	-	-	-	-	-	-
3 (3)	46	81	-	-	-	-	-	-

動機台数と馬力数をみたものである。全県の総台数297台、5,692馬力のうち、種類別では汽機・蒸機⁵⁾の89台、3,690馬力が最も多く、台数の30%、馬力数の65%を占めており、織物工場動力化の中心的存在となっている。次いで、台数では石油発動機が、馬力数では瓦斯発動機が多く、電動機がこれらに続いて、水車はわずかな台数にとどまっている。種類ごとの平均馬力数は汽機・蒸機が41.5馬力、瓦斯発動機が14.1馬力、石油発動機が8.4馬力、電動機が6.8馬力、水車が5.0馬力となっており、汽機・蒸機類が大出力に対応していることがわかる。瓦斯発動機がこれに次ぎ、やや出力が大きく、石油や電動機をかなり上回っている。

郡市別にみると、台数、馬力数とも知多郡が最大で、121台3,458馬力と、

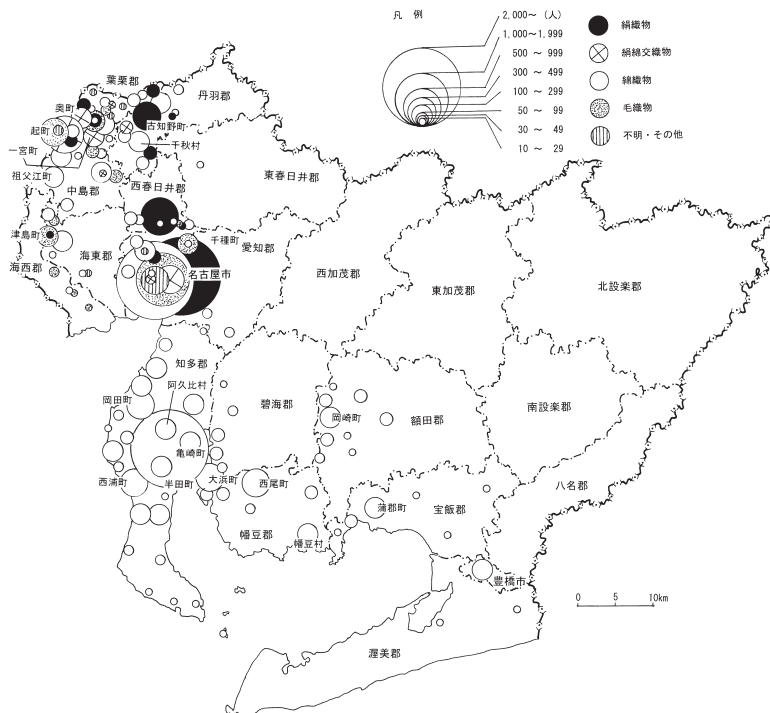
第4表 愛知県における織物工場の原動機種類別台数・馬力数（1912年）

	汽機・蒸機		瓦斯発動機		石油発動機		電動機		水車		合計	
	台数	馬力	台数	馬力	台数	馬力	台数	馬力	台数	馬力	台数	馬力
愛知県計	89	3,690	67	943	70	589	65	441	6	30	297	5,692
名古屋市	38	382	1	8	1	5	25	60	-	-	65	455
愛知郡	4	160	2	35	3	36	8	35	-	-	17	266
東春日井郡	-	-	-	-	1	8	-	-	-	-	1	8
西春日井郡	1	50	-	-	1	30	5	150	-	-	7	230
丹羽郡	1	57	1	30	-	-	1	2	-	-	3	89
葉栗郡	3	38	1	12	2	23	-	-	-	-	3	35
中島郡	2	182	5	95	-	-	-	-	-	-	8	133
海東郡	-	-	-	-	5	32	-	-	-	-	7	214
海西郡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
知多郡	28	2,570	40	494	34	243	19	151	-	-	121	3,458
豊橋市	-	-	3	35	1	7	-	-	-	-	4	42
碧海郡	5	90	6	115	10	73	-	-	-	-	21	277
幡豆郡	4	95	3	58	2	14	2	8	-	-	11	175
額田郡	3	67	1	3	1	15	5	36	6	30	16	151
宝飯郡	-	-	3	50	7	30	-	-	-	-	10	80
渥美郡	-	-	1	8	2	73	-	-	-	-	3	81

注) 単位は(台)、(馬力)。台数には馬力数不詳または電動機のキロ単位のものを含む。
出典) 第3表に同じ。

台数で4割、馬力数では6割を占めて、他を圧倒している。1台当たりの平均馬力数も28.6馬力と、愛知県内では規模が大きい。これに次ぐ名古屋市が65台455馬力であるが、平均馬力数は7.0馬力にとどまり、県内最小となっている。尾張地方では名古屋市周辺の愛知郡や西春日井郡で台数、馬力数とも多くなっているが、尾西地方の各郡は全体として原動機の普及度が低いままである。むしろ、原動機の絶対数は三河地方の各郡で多く、動力化が県内各地の織布特性に応じて、異なる展開を示していることがわかる。なお、知多郡の場合は、種類別では瓦斯発動機と石油発動機が最も普及しており、汽機・蒸機はそれらに次ぐが、馬力数では汽機・蒸機が他の原動機を圧倒しており、同郡の汽機・蒸機の1台当たり平均馬力数は91.8馬力に達して、全県最大となっている。他方で名古屋市では、原動機の6割近くが汽機・蒸機で占められ、これに電動機が次いでおり、瓦斯および石油発動機はあまり使用されていない。名古屋市周辺の愛知郡や西春日井郡でも電動機使用比率が高く、瓦斯、石油の各発

大正期愛知県における織物工場の分布特性



第1図 愛知県における織物工場職工数の市町村別分布（1912年）

注) 凡例は第1図～第2図に共通する。

資料) 『愛知県統計書』(大正元年版) 所収「工場表」より作成。

動機はあまり普及していない。その他の郡では瓦斯および石油発動機が比較的広く使用されており、額田郡では水車利用が目立っていて、それぞれの地域特性が強く現れている。

最後に市町村別の展開状況を見ておこう。1912年の市町村別種類別織物工場職工数分布は第1図に掲げたが、工場職工数分布には大きな三大集積地と、その周辺に展開するやや小規模な集積地が認められる。三大集積地は、名古屋市のその周辺部（名古屋市、愛知郡、西春日井郡）、尾張北西部（中島郡、葉栗郡、丹羽郡）、知多郡で、これらに比べると、集積の規模や程度は弱いが、海部地方（海東郡、海西郡）と西三河地方（碧海郡、幡豆郡、額田郡）の二つの集積地が該当する。

名古屋市とその周辺地域では、名古屋市、なかでも、中区（81工場3,292人）がその集積の中心であり、綿織物を主体として絹織物、毛織物、絹綿交織など各種の織物工場が集積している（分布図では区ごとには表示していない）。その分布は周辺部に向かって拡大し、愛知郡愛知町（6工場223人）や千種町（2工場123人）、西春日井郡金城村（2工場659人）などに広がっている。この時点では絹織物関係がかなり目立っているが、毛織物も大きくなってきていることがわかる。尾張北西部では、尾西地方を中心に3郡の23町村に織物工場が展開しているが、中島郡起町（35工場1,096人）が大きな核となっている。起町では旧来からの絹綿交織が21工場704人と依然中心をなしており、これに毛織物の6工場224人が次いで、後の毛織物工場展開の前触れとなっている。同郡では起町に隣接する今伊勢村（8工場310人）や一宮町（9工場245人）、奥町（4工場211人）、稲沢町（6工場207人）などが主な町村である。明治期と同様に、郡南部では綿織物工場が多いが、起町周辺では絹綿交織や毛織物が多い。中島郡の北に接する葉栗郡では葉栗村（5工場102人）や木曾川町（6工場97人）などが主であるが、絹、絹綿、綿など種類が多様である。さらに東の丹羽郡では同郡西部に織物工場が集中し、古知野町の18工場433人を最大に、布袋町（4工場220人）、千秋村（6工場203人）などが主な町村である。古知野町は絹織物が中心をなすが、周辺では綿織物も多くなっている。

知多郡は25町村に織物工場が分布するが、半田町に3工場2,888人と職工数の大きな集積がみられる。しかし、この年次はたまたま三重紡績知多分工場（2,864人）が織物業の項目に含まれているため、これを別とすれば、岡田町の7工場400人が最も多く、以下、西浦町（16工場378人）、亀崎町（10工場292人）、成岩町（11工場238人）、阿久比村（14工場228人）などが続いている。ほぼ郡の中央部に大きな織物工場の集積があり、そのすべてが綿織物工場である。亀崎町と豊浜町の各1工場でのみ原動機の使用をみない。

これら三大集積地以外では、津島町を中心とする海部地方に毛織物工場を中心とする集積ができはじめており、海東、海西2郡を合わせて、7町村に19工場548人を数えるが、そのうち津島町が6工場308人を占めている。同町では職工数では毛織物が167人と最多であるが、綿織物も3工場126人を数え、絹

織物もみられるなど、毛織に特化しているわけではない。他方、北隣の佐織村は明治期には綿織物工場が多くみられたが、この年には毛織物も多くなりつつある。また、三河地方では碧海郡大浜町（15工場388人）、幡豆郡西尾町（8工場432人）、額田郡岡崎町（10工場228人）をそれぞれの核に綿織物工場の集積がみられるが、尾張地方ほどの集積度の高まりはみられない。なお、宝飯郡では西部の蒲郡町を中心に古くからの綿織物工場の集積が依然としてみられるが、西三河地方の集積の一端をなすとみた方がよいだろう。東三河では豊橋市に4工場109人をみるが、全体としては織物工場がほとんど展開していない。同地方では豊橋市を含めて、養蚕地帯として製糸工場の展開が活発で、織物工場への展開がみられないのである。

4. 大正中期における織物工場の分布

第一次世界大戦（1914年～1918年）の勃発による東アジアにおける欧州列強の市場からの後退は、日本の繊維工業に大陸市場の急拡大をもたらすこととなり、全国で織物工場が急増し、生産額もうなぎ登りとなった。愛知県においても、この間に急速な工場数の増加がみられ、それがその地域的展開にも大きな影響を与えることになった。ここでは『工場通覧』を利用して、1920（大正9）年の織物工場の分布状況をみておこう。前述のように、同年の資料は1月1日現在値であるため、既存統計との整合性からみれば、実質的には1919年末現在とほぼ同様とみてよいだろう。

1920年の郡市別種類別織物工場の状況を示した第5表をみると、愛知県全体では847工場36,574人のうち、工場数では知多郡の208工場が最も多く、名古屋市の128工場、中島郡の113工場、海部郡⁶⁾の108工場がこれに続いている。職工数では愛知郡の6,876人が最も多く、知多郡の6,293人がこれに次ぎ、以下、名古屋市の5,689人、中島郡の3,314人、西春日井郡の3,075人、海部郡の2,663人がこれらに続いている。名古屋市の周辺に位置する愛知郡や西春日井郡での工場数の増加、とりわけ大規模工場の増加が職工数の急増をもたらしており、名古屋市とその周辺部で212工場15,640人と非常に大きな比率を占めるに至っている。また、海部郡での工場数の増加も著しい。ほとんどの郡市で工場数、

第5表 大正中期愛知県の郡市別織物工場（1920年）

	織物合計			絹織物			絹綿交織物		
	工場数	職工数	馬力数	工場数	職工数	馬力数	工場数	職工数	馬力数
愛知県計	847(484)	36,574	13,180	49(9)	2,310	283	48(7)	2,051	620
名古屋市	128(25)	5,689	1,329	16(1)	312	1	17(2)	1,461	594
愛知郡(11)	57(6)	6,876	4,337	6(1)	139	22	1(1)	19	15
東春日井郡(3)	6(2)	481	87	-	-	-	-	-	-
西春日井郡(4)	27(17)	3,075	720	2(1)	1,429	215	1(-)	13	-
丹羽郡(9)	36(25)	1,890	540	15(6)	293	45	3(1)	49	3
葉栗郡(6)	21(8)	530	79	6(-)	87	-	5(1)	72	5
中島郡(11)	113(50)	3,314	552	4(-)	50	-	21(2)	437	3
海部郡(13)	108(14)	2,663	488	-	-	-	-	-	-
知多郡(23)	208(205)	6,293	3,314	-	-	-	-	-	-
豊橋市	2(2)	110	43	-	-	-	-	-	-
岡崎市	20(7)	1,159	271	-	-	-	-	-	-
碧海郡(7)	21(18)	664	413	-	-	-	-	-	-
幡豆郡(7)	36(19)	1,447	286	-	-	-	-	-	-
額田郡(9)	23(22)	1,139	261	-	-	-	-	-	-
東加茂郡(1)	2(2)	26	5	-	-	-	-	-	-
宝飯郡(6)	38(35)	1,204	441	-	-	-	-	-	-
渥美郡(1)	1(1)	14	20	-	-	-	-	-	-

注) 郡名欄の()は織物工場所在町村数、工場数欄の()内は原動機使用工場数、単位は工場数(工場)、職工数(人)、馬力数(馬力)。織物工場のない西加茂、北設楽、南設楽、八名の4郡は省略した。

出典)『工場通覧』(大正10年版)を整理集計して作成。

職工数とも増加しているが⁷⁾、各郡市とも綿織物工場の増加が目立っている。

織物種類別では絹織物、絹綿交織ともほぼ名古屋市と尾張北西部に分布が限られ、次第に広がりやを欠くようになっている。これに対して綿織物は織物工場の所在する全郡市に展開しており、名古屋市周辺地域では大規模な工場が多く立地している。毛織物工場は海部郡で急速に増加し、77工場2,108人と他地域を圧倒しているが、比較的小規模なものが多く、原動機の使用比率も低い状況にある。これに中島郡の28工場1,369人が次ぐが、名古屋市とその周辺部に合わせて29工場、1,303人が集まり、津島、尾西、名古屋の3集積地が形成されてきている。

原動機使用状況をみると、全県では484工場13,180馬力と、1912年に比して大きく増加しているが、全工場に占める割合は57.1%とやっと過半を占めるに

大正期愛知県における織物工場の分布特性

綿織物			毛織物・同交織物			その他・不明		
工場数	職工数	馬力数	工場数	職工数	馬力数	工場数	職工数	馬力数
572(417)	26,340	11,194	135 (32)	4,811	888	43 (19)	1,062	197
61 (16)	3,071	709	22 (4)	601	8	12 (2)	244	17
44 (26)	6,320	4,102	3 (2)	315	170	3 (2)	83	28
6 (2)	481	87	-	-	-	-	-	-
17 (13)	1,207	404	4 (2)	387	96	3 (1)	39	5
18 (18)	1,548	492	-	-	-	-	-	-
7 (7)	288	74	1 (-)	31	-	2 (-)	52	-
48 (26)	1,185	232	28 (17)	1,369	261	12 (5)	273	58
28 (5)	503	121	77 (7)	2,108	354	3 (2)	52	13
207(204)	6,162	3,294	-	-	-	1 (1)	131	20
2 (2)	110	43	-	-	-	-	-	-
20 (7)	1,159	271	-	-	-	-	-	-
19 (17)	632	400	-	-	-	2 (1)	32	13
34 (17)	1,390	276	-	-	-	2 (2)	57	10
21 (20)	1,052	230	-	-	-	2 (2)	87	31
1 (1)	14	2	-	-	-	1 (1)	12	3
38 (35)	1,204	441	-	-	-	-	-	-
1 (1)	14	20	-	-	-	-	-	-

とどまっている。郡市別では知多郡の205工場が最も多く、前の時期と同様、ほとんどの工場に原動機使用が及んでいる。これに中島郡の50工場、宝飯郡の35工場、名古屋市と丹羽郡の25工場などが続いているが、名古屋市では動力化の比率がなお20%を下回っている。馬力数では愛知郡に大規模工場が多く立地していることもあって、同郡が4,337馬力を数えるが、知多郡の3,314馬力がこれに次ぎ、名古屋市の1,329馬力が続いている。織物種類別では綿織物工場での原動機使用が大部分を占め、毛織物工場がこれに次いでいる。ただし、郡市ごとに動力化の程度はまちまちで、尾西地方や海部郡などで動力化が後れており、三河地方では知多郡に次いで原動機の使用する割合が高い。

原動機使用状況をもう少し詳しくみると（第6表参照）、全県で755台13,180馬力のうち、「他より電力供給を受くるもの（以下、他より受電と略称）」が

405台7,254馬力を占めて最も多く、電力供給業者からの受電が台数、馬力数全体の過半を占めるようになっている。これは名古屋市やその近郊などの都市部や尾張北西部で比較的高い割合を占めるようになっているが、海部郡や三河地方で比較的低い比率にとどまっている。電力供給事業の展開の地域差が現れた結果であろう。これに次いで瓦斯発動機の割合が高く、全体の3割弱を占め、汽機・蒸機、水車、石油発動機の順となっている。石油発動機がこの間に知多郡などを除いてほとんど姿を消し、「他より受電」が原動機普及に大きく影響していることがわかる、瓦斯発動機は普及の早かった知多郡で依然として中心的な原動機となっているが、ここでも電力供給地域の拡大によって、「他より受電」の比率が台数で3分の1を占めるにまで拡大している。また、海部郡や碧海郡、宝飯郡などでも瓦斯発動機の使用比率が高く、原動機の種類に明

第6表 愛知県における織物工場の原動機種類別台数・馬力数（1920年）

	汽機・蒸機		瓦斯発動機		石油発動機		電動機		他より受電	
	台数	馬力	台数	馬力	台数	馬力	台数	馬力	台数	馬力
愛知県計	46	1,824	223	3,666	11	64	48	247	405	7,254
名古屋市	5	344	—	—	—	—	1	16	47	969
愛知郡	8	650	6	69	—	—	1	7	93	3,611
東春日井郡	1	x	1	17	—	—	1	2	4	68
西春日井郡	4	85	2	28	—	—	2	44	39	563
丹羽郡	2	4	10	209	—	—	1	3	24	324
葉栗郡	—	—	3	42	—	—	—	—	7	37
中島郡	3	70	8	125	—	—	2	5	48	342
海部郡	3	207	12	204	—	—	5	58	3	19
知多郡	13	305	131	2,099	5	29	19	65	83	817
豊橋市	—	—	—	—	—	—	—	—	2	43
岡崎市	2	x	2	80	2	15	—	—	7	176
碧海郡	3	114	14	194	1	7	6	17	9	80
幡豆郡	2	46	6	86	1	3	4	11	17	136
額田郡	—	—	5	127	—	—	3	3	8	25
東加茂郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
宝飯郡	—	—	22	371	2	10	3	17	13	43
渥美郡	—	—	1	15	—	—	—	—	1	5

注) 単位は(台)、(馬力)。xは値不詳分。台数には馬力数不詳または電動機のキロ単位のものを含む。
出典) 第5表に同じ。

瞭な地域差が認められる。このほか、三河地方、とくに額田郡を中心に水車利用が増加して、台数、馬力数とも1912年よりも3倍以上の増加となっている。

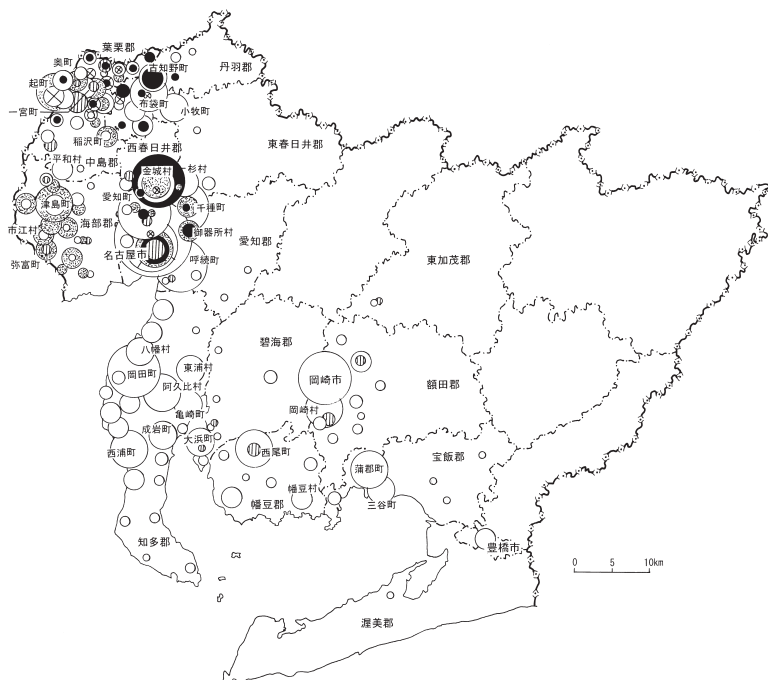
最後に市町村別の展開状況を見ると（第2図参照）、名古屋市は大正初期に比べて工場数、職工数とも減少したのに対して（図示していないが、とくに中区、西区の減少が顕著である）、周辺の愛知郡、西春日井郡の町村で工場数、職工数とも増加し、この1市2郡全体では1912年の205工場8,507人から1920年の212工場15,640人へ、とりわけ職工数の急激な増加がみられる。すなわち、名古屋市およびその周辺地域では織物工場分布の外延的拡大が進行しており、愛知郡千種町の23工場2,193人（愛知織物(株)千種工場1,377人）、愛知町の14工場2,047人（菊井紡織(株)1,677人）、呼続町の1工場1,921人（(株)近藤紡績所）や西春日井郡金城村の12工場2,602人（帝国撚糸織物(株)1,402人）などに大規模

工場が立地するようになっている。

愛知郡では綿織物工場がその大半を占め、千種町には200人規模の毛織物工場もみられるが、西春日井郡金城村では絹織物工場、毛織物工場が目立っている。このほか、愛知郡御器所村や西春日井郡杉村などに織物工場の大きな集積がみられる。

尾張北西部では、丹羽、葉栗、中島3郡の26町村に170工場5,734人を数え、中島郡北部の起町の37工場1,407人を筆頭に、同郡では互いに近接する一宮町（22工場424人）、今伊勢村（12工場375人）、奥町（11工場319人）が、丹羽郡では古知野町（12工場624人）、布袋町（4工場574人）などが大きな集積地となっている。大正初期に比べて、絹

水車		不明		合計	
台数	馬力	台数	馬力	台数	馬力
20	116	2	10	755	13,180
-	-	-	-	53	1,329
-	-	-	-	108	4,337
-	-	-	-	7	87
-	-	-	-	47	720
-	-	-	-	37	540
-	-	-	-	10	79
-	-	2	10	63	552
-	-	-	-	23	488
-	-	-	-	251	3,314
-	-	-	-	2	43
-	-	-	-	13	271
1	2	-	-	34	413
2	4	-	-	32	286
15	106	-	-	31	261
2	5	-	-	2	5
-	-	-	-	40	441
-	-	-	-	2	20



第2図 愛知県における織物工場職工数の市町村別分布（1920年）

注）凡例は第1図～第2図に共通する。
資料）『工場通覧』（大正十年版）より作成。

綿交織の比率が下がり、毛織物の比率が大きくなっていることがわかる。中島郡南部では祖父江町の集積度が低下し、平和村や稲沢町での集積が高まっているが、綿織物を中心としつつも、毛織物工場も現れ始めている。これらより南側に位置する海部郡では津島町で23工場981人と織物工場の集積度が高まり、同町周辺の市江村（13工場331人）や永和村（12工場262人）、弥富町（12工場211人）などで織物工場が目立つようになってきている。いずれも毛織物工場が主体をなしており、津島町を中心とした毛織物工場の集積地が形成されつつあることがうかがえる。

知多郡では23町村に208工場6,293人の集積がみられ、1912年に比して、工場数では倍近くに増加しているが、職工数では600人余の増加にとどまっている。ただし、1912年に含まれていた先述の半田町にある三重紡績の工場が含

まれていないため、実質的には職工数も相当数増加したことになり、12年の三重紡績知多分工場を除く織物工場の平均職工数25.5人に対して、20年のそれは30.2人とむしろ工場の職工数規模は拡大している。ただし、町村ごとに工場規模にはかなりの差があり、工場数が最も多い西浦町では44工場、それに次ぐ東浦村に26工場、阿久比村に25工場を数える。しかし、職工数では岡田町の1,332人（17工場）が最も多く、これに西浦町の915人が次ぎ、さらに阿久比村（603人）、亀崎町（8工場483人）、成岩町（15工場475人）、東浦村（400人）などが続いている。1工場当たり平均職工数は、岡田町の78.4人が最大で、これに亀崎町の60.4人や横須賀町の57.4人が続くが、東浦村の15.4人が最も小規模で（大府町は1工場15人をみるが）、西浦町も20.8人にとどまっている。なお、織物工場が全町村で綿織物に特化して、郡中央部に集積する地域的傾向には大きな変化はない。

三河地方では、岡崎市、碧海郡大浜町、幡豆郡西尾町、宝飯郡蒲郡町を中心とした綿織物工場集積地が、いずれもその規模を増大させているが、なかでも岡崎市が20工場1,159人となっているほか、南隣の岡崎村も3工場516人を数えて、その集積度が大きく高まっている。また、西尾町も12工場1,028人に達し、蒲郡町（21工場671人）と隣接する三谷町（12工場420人）の集積も大きくなっている。それらに比べると、大浜町（11工場460人）の集積は1912年よりも職工数では増加しているものの、工場数は減少しており、三河地方の全般的な織物工場の増加のなかで、やや停滞的な傾向を示している。なお、大まかな地域的傾向は知多郡と同様に、大正初期と大きくは変化しておらず、矢作川中下流域の市町村に集中する傾向を示している。

5. 尾西地方における織物工場の動向—中島郡今伊勢村の事例—

愛知県の織物工場は、大正期には尾張地方、三河地方とも綿織物生産を中心に急速な地理的拡大を示したが、同時にその生産品目の転換が尾張地方で明瞭に進むようになった。とくに尾張北西部では、従来の絹綿交織工場が毛織物工場に入れ替わっていく状況が明らかとなった。では、その絹綿交織工場の減少と毛織物工場の増加に象徴される織物生産状況の変化は、各村ではどのように

第7表 明治大正期中島郡今伊勢村の織物工場一覧

工場名称	工場主名	大字	創業年月	1906年	07年	08年	09年
今井織工場	今井孫右衛門	馬寄	1899年2月	…	…	…	17 B
今枝織工場	今枝淳一	馬寄	1912年9月				
六庄織物工場	今枝庄次郎	馬寄	1913年3月				
今徳織工場	今枝徳次郎 e	開明	1900年11月 i	…	…	…	…
今枝織物工場	今枝孫七	馬寄	1907年		◎	…	…
鶺鴒織工場 a	鶺鴒幸三郎	開明	1896年2月	91 G	24 G	23 B	18 B
マル庄織工場	白井庄助 f	開明	1906年2月	◎	…	…	13 G
マル兵加藤織物工場	加藤兵太郎	(不詳)	1916年9月				
柴垣織工場	柴垣八重	(不詳)	1910年4月				
マル又田中織工場	田中保明	開明	1915年2月				
成瀬織工場 b	成瀬市太郎	本神戸	1901年5月 j	…	13 G	23 C	21 C
成瀬織工場	成瀬重右衛門	本神戸	1907年3月 k		28 G	29 B	50 B
則武織工場	則武幸太郎	本神戸	1903年4月	…	…	…	21 G
マル栄織工場 c	則武栄吾 g	本神戸	1916年9月				
則武織工場	則武勘市	本神戸	1906年9月	◎	14 G	21 B	
マルカ織工場	則武辰蔵	本神戸	1914年2月 l				
日比野織工場	日比野市次郎 h	本神戸	1905年	…	…	…	15 C
松岡織工場	松岡忠右衛門	新神戸	1873年				8 G
マル壽織工場	松野寿之助	(不詳)	1918年1月				
村橋織工場 d	村橋嘉十郎	馬寄	1894年2月 m	221 G	129 G	126 B	100 BC
柳田織工場	柳田廉治	馬寄	1899年4月	…	…	…	17 B
吉村織工場	吉村繁太郎	(不詳)	1901年3月	…	…	…	…
マルヨ織工場	渡辺与三郎	開明	1896年9月	87 G	28 G	28 B	11 G

注) 職工数の単位は(人)、原動機の記号 e は他よりの受電を示す。記号のないものは原動機なし。
◎は創業年、…は創業以降で「個別工場一覧」に記載のないことを示す。

織物種類は A : 絹織物、B : 絹綿交織、C : 綿織物、D : 毛織物、E : 綿毛交織、F : その他、G : 不明。脚注 a : 09年以降丸庄織工場、b : 09年以降扇屋織工場、c : 19年は則武織物分工場、d : 08年以降村橋織物(資)、e : 16年以降徳三郎、『一宮市今伊勢町史』によれば、徳太郎、f : 16年以降作治、g : 19年は栄吉、h : e と同書によれば、市太郎の表記も、i : 16年以降1905年11月、j : 09年以降1893年など、k : 16年以降1857年など、l : 1895年や1898年の記載もあり、m : (資)は08年9月以降。なお、1914年、15年は資料がないため省略。工場名称のマル何々はマルの次の文字を丸囲みした屋号の読み下して、たとえば、マルカ織工場は㊦織工場と原資料で表記されていたものである。

出典) 各年の「個別工場一覧」(『愛知県統計書』、『工場通覧』)および『一宮市今伊勢町史』より作成。

大正期愛知県における織物工場の分布特性

職工数・原動機 (上段)			織物種類 (下段)				
10年	11年	12年	13年	16年	18年	19年	20年
18 B	18 B	19 B ◎	27 C … ◎	24 B 10 B	26 B 11 B	16 BE 11 CB	19 CE 11 A
…	…	…	11 B	11 B	13 BC	13 CE 10 C	
…	…	…	…	…	…	…	
10 B 13 G	14 G	…	…	12 B ◎	…	10 G	10 G 11 G
◎	…	…	13 A	…	…	…	
…	…	…	…	22 CB	18 B 10 C	14 B 10 G	
13 C 37 B 21 G	13 CB 36 B 21 B	… 50 B 20 B	13 C 59 B 19 B	… 40 B 21 B	18 B 10 C 46 B 23 CB 14 G	44 B 16 G 14 C	24 B 16 G
…	…	…	…	39 B 26 B	23 B 22 B	34 C 27 BA	34 C 30 B
16 C 27 G	17 C 38 G	23 B 57 A	29 B 67 G	52 B	58 BC ◎	49 ^e A 12 G	51 ^e CF 14 DA
105 BE 17 B …	102 BC 17 B …	102 EDBC 26 B …	85 DB 27 B …	74 DBE 29 BE …	100 DB 30 BE 22 C	168 ^e DE 21 ^e BE 15 C	135 ^e D 20 ^e CD
12 G	12 G	13 G	10 B	…	…	…	

載条件に該当しなかったのかも明らかではない。記載された創業年別では、明治30年代が9工場で最も多く、大正期の7工場がこれに次いでいるが、近隣の起町や一宮町などに比べて、同村全体としては創業年が遅い傾向がみられる。大字別に工場主みると、本神戸7人、馬寄6人、開明5人、新神戸1人で、不詳分が4人である。本神戸は一宮町市街地の北側にほぼ連続する、岐阜と名古屋を結ぶ脇街道沿いの集落で、その北側に新神戸があり、そのさらに北に馬寄集落がある。開明はこれらよりも西側の奥町に隣接する集落の一つである。

今伊勢村の東寄りの集落に工場主が多い傾向はあるが、ほぼ村内各地から工場主が現れている。工場創業年もとくに大字ごとの前後が明瞭なわけではなく、明治期には絹綿交織と綿織物を生産の中心としていることがわかる。1906年以来村内の工場数はじょじょに増加し、1919（大正8）年には17工場を数えて最大となっている。原動機の導入は遅れ、1919年に松岡織工場、村橋織工場、柳田織工場の3工場、他よりの受電によって電動機を入れている⁸⁾。1909（明治42）年時点で11工場を数えるうち、絹綿交織を筆頭品目とする工場が5工場、綿織物が2工場、不明が4工場、不明分は原資料での記載が単に「織物」あるいは「縞」などとなっている事例である。したがって、不明分のなかにも絹綿交織がかなり含まれていると想定すると、絹綿交織工場が過半を占めていたとみられるが、1919年の17工場中、絹綿交織は5工場、綿織物が6工場、絹織物と毛織物が各1工場、不明分が4工場となり、絹綿交織のうち2工場と綿織物のうちの1工場は、綿毛交織も品目としてあげられている。

個別工場をみると、大正期に入る頃から馬寄の村橋織工場で毛織物生産が始まっており、もともと絹綿交織工場であった同工場は1912年以降毛織物工場へ分類されるようになる。同じく馬寄の今井織工場、柳田織工場、開明の今徳織工場も絹綿交織から大正期に毛織物や綿織物に品目が転換している。また、開明の鶴飼織工場やマルヨ織工場のように、ほぼ明治期で絹綿交織のまま工場の姿を消す事例もある。もちろん、大正期になって絹綿交織として新たに登場する工場や本神戸の日比野工場のように、綿織物から絹綿交織へ転換する工場もみられるが、大きな流れは絹綿交織から毛織物、綿織物への転換とみること

ができる⁹⁾。そして、そこには同一工場で絹綿交織から毛織物等への転換の事例と、大正期における絹綿交織工場の廃業および毛織物工場等の新規創業の事例とが相まって、こうした地域全体としての品目転換が生じていることが明らかとなる。ちなみに、1920年の12工場中では、綿織物が4工場（うち2工場は毛織物、綿毛交織も品目としている）、絹綿交織と毛織物が各2工場、絹織物が1工場、不明分が3工場となっている。もちろん、このことは単に今伊勢村の事例に限られたことではなく、尾西地方のこの時期の製造品目転換の大きな流れを象徴的に示しているのである。

6. おわりに

これまでみてきたように、大正期における愛知県の織物工場の展開は、明治期に形成されてきた基本的な地域的特性を前提としながら、名古屋市とその周辺部における大規模工場の展開と工場分布域の外延的拡大、尾張北西部や海部郡における濃密な工場展開とその地理的な拡大、および、絹綿交織に代わる毛織物工場の急速な展開、知多郡、三河地方における綿織物工場のいっそうの展開といった分布動向上の特性を示すものであった。第一次世界大戦による戦争景気と、欧米列強からの輸入途絶、東アジア大陸市場の拡大という諸要因が、大正前半期の日本の繊維工業に未曾有の好景気をもたらし、綿織物生産の急激な拡大をもたらす一方で、生活習慣の欧風化、近代化や軍需の拡大が在来の着尺需要の低下と毛織物生産の拡大をもたらすことになった。こうした時代状況のなかで、愛知県における織物生産も、そうした状況を反映した展開を示してきたことがわかる。

名古屋市はこの時期、織物業において依然として重要な拠点をなしており、在来の絹織物、絹綿交織、綿織物の手機生産が残存するなかで、比較的規模の大きな綿織物工場や新興の毛織物工場が、同市を取り巻く愛知郡や西春日井郡の諸町村に展開するようになった。また、尾張北西部では、中島郡を中心に葉栗郡から丹羽郡西部に大きな織物工場の集積地が形成され、丹羽郡などでは依然絹織物工場が重要な役割を果たすものの、中島郡では絹綿交織の比重が低下し、毛織物への転換が進む一方で、好景気に支えられた綿織物生産の拡大も進

んだことがわかる。さらに、尾張西部の海部郡では佐織村など明治期に郡北部にみられた在来綿織物生産の工場集積が弱まる一方で、津島町を中心として、毛織物工場が周辺町村に急速に展開したことがわかる。この時期は尾張西部地域が北側の絹、絹綿、綿、毛織の各種工場の混在状態になっていたのに対して、南側の海部郡域では、毛織物生産への特化が一足早く進み出していたのである。これらの地域では、製造品目の主体が綿生地であるため、力織機の導入が比較的緩慢にしか進まず、この時期でもなお半数前後の工場は手織生産であった。しかし、小規模工場にもじょじょに原動機の導入が始まっており、大正期には電灯・電力供給事業の拡大によって、都市部を中心に電力供給を受けて電動機による動力化が進むようになったが、農村部ではなお瓦斯発動機への依存度が高かった。

これらの地域に対して、知多郡と三河地方では、ほぼ一貫して綿織物工場の展開が大きな特色となっている。知多郡の綿織物工場は、郡中央部を中心にほぼ全域にわたって展開している。同郡では主として白綿布類の生産が中心であるため、比較的早くから力織機の導入が進み、原動機使用工場が織物工場の大部分を占める状況が明治末以来継続しており、地場の比較的規模の大きな工場が集積する町村もみることができる。これらの工場の多くは瓦斯発動機、あるいは、蒸機・汽機を原動機とするものが多く、この時期には電動機の導入はそれほど進んではいない。三河地方でも綿織物生産が中心をなすものの、在来の縮木綿類製造も含まれるため、知多郡ほど原動機使用は進展していない。同地方には、碧海郡大浜町、幡豆郡西尾町、岡崎市（旧額田郡岡崎町）、宝飯郡蒲郡町などの織物工場の集積地が成立していた。こうした西三河を中心に展開した織物工場の分布は、矢作川とその支流流域に集中する傾向にあり、とくに額田郡ではこの時期に水車動力の利用が進展している。大正期には電動機との併用が一般的となるが、水車利用が同郡の大きな特色となっている。これは、水力利用という点からは在来技術による紡績部門のガラ紡による水車紡績とも関連しており、その製品である太番手綿糸を原糸とする織布業との関連についても検討課題となる¹⁰⁾。なお、東三河では織物工場の展開があまりみられないが、このことは、この時期に東三河の各郡で相当数展開した製糸工場の動向、

より広く養蚕業や製糸業との競合問題など、労働力需給状況に関しての検討を要する課題である。

注

- 1) 拙稿(2014)「明治期愛知県における織物工場の地域的展開」『愛知県立大学日本文化学部論集(歴史文化学科編)』5、pp. 51-83。
- 2) 拙著(2001)『綿工業地域の形成』、大明堂
- 3) 拙稿(2011)「明治大正期愛知県下織物生産の統計的分析」『愛知県立大学日本文化学部論集(歴史文化学科編)』2、pp. 1-32。
- 4) 大阪府における「個別工場一覧」においても、この2カ年分は資料が存在していない。前掲2)参照。
- 5) ここでは「個別工場一覧」の記載のうち、蒸気機関を汽機、蒸気タービンを蒸機と表記して、この両者をまとめて汽機・蒸機としている。また、瓦斯発動機については、この時期、大都市部で都市ガスを用いた発動機の使用もあるようであるが、織物工場の場合、多くが石炭ガス発生装置を用いた発動機のことを指しているとみられるので、本稿でも瓦斯発動機は後者の意味で用いている。さらに電動機は、自家発電による場合と電灯会社等からの電力供給による場合とがあるが、『工場通覧』の記載では前者を「電動機」、後者を「他より電力供給を受くるもの」として区別している一方で、『愛知県統計書』では電動機としての記載しかなく、1912年値については両者の区別は付かない。水車については『工場通覧』では日本式、トルビン式、ベルトン式の区別をなしているが、ここではすべてを合算して水車としている。
- 6) 1913(大正2)年4月に海東郡と海西郡は統合されて海部郡となっている。統合前後による町村数の変化はない。
- 7) 額田郡では1912年に比して見かけ上工場数が減少しているものの、これは1914(大正3)年10月に岡崎町が岡崎市に昇格し、額田郡から外れたため、この地域でも実態としては工場、職工数とも急速に増加している。
- 8) 『電気事業要覧』によれば、今伊勢村への電灯・電力供給は、一宮町に本社を置く一宮電気株式会社が事業主体となって、1913(大正1)年12月に開始されている。通信省電気局編(1916)『第八回電気事業要覧』pp. 46-47。
- 9) なお、戦前期における今伊勢村の主要な個別工場の状況に関しては、以下の文献を参照されたい。今伊勢町史編さん委員会編(1971)『一宮市今伊勢町史』、今伊勢町史編さん委員会(一宮市今伊勢出張所内)
- 10) 北野進(1994)『産業考古学シリーズ[4]発明の文化遺産 臥雲辰致とガラ紡機—和紡糸・和布の謎を探る—』、アグネ技術センター、pp. 157-173。